

巻頭言

「共生の時代」をむかえて

『ベル・エポックな時代』を生きる

東北パイオニア株式会社 OEL事業戦略室長 市岡 博



日本企業が置かれている現状を一企業人の目線から考察してみる事にした。

大阪で商売を覚え・名古屋で節約を覚え・東京で政治を覚える

一九七〇年～八〇年代まさしく「日本の時代・高度成長の時代」であった。と同時に、われわれと違う価値観の存在を直接肌で感じた時代でもあった。一九八五年プラザ合意を契機として特に、製造業においては、海外投資が積極的に行われグローバル化が一気に加速した。それは、国家間の政治問題となったからである。しかし、ビジョンが明快な時代でもあった。生産機能の海外移転に力点が置かれたグローバル化の展開がここから始まった。

社会人としてスタートをする時に、父から贈られた言葉が副題のそれである。これからは、企業規模の大小ではなく、経営者の力量で決まる時代。単眼ではなく、トンボのような複眼で考え行動する能力が要求される。日本のルール・ものさしは普遍的なものではなく、むしろ世界ではマイノリティーであるという事である。この言葉を、今でも自分の座右の銘にしている。

今なぜ中国なのか さらなるグローバル化の展開

当社も一九八九年メキシコ進出を皮切りに一九九五年タイ・上海工場を立ち上げ現在に至っている。今日的にはその意味合いが変わりつつある。当社の最大顧客であるカーメーカーが更なる海外生産を進め、部品の現地調達を加速させているからである。当社は、典型的な労働集約型産業である。良質な労働力を使い競争力ある価格で高品質な製品をタイムリーに日本の生産拠点に提供する（O U T

I N）形態から、今後は、海外拠点に納入する（O U T O U T）形態がますます主流となってくる。

この動きに拍車をかけたのが、二〇〇一年二月中国のW T O加盟である。今では、世界の工場と呼ばれているが、その魅力は何なのか。私は、以下の四点に集約できていると思う。

- (1) 優秀な若年労働力確保の容易さ。
- (2) 投資規模が小さくて済み、回収効率が良い事。経営リスクが小さい事。
- (3) 外資導入政策によるメリット享受。
- (4) 十二億のマーケットが存在するという事。

今日の更なるグローバル化の特徴は、企業とその系列の枠を超え、かつ国境を乗り越えた提携が活発化していることである。キーワードは『共生』である。自社の事業ドメインに経営資源を集中させ、それ以外の分野はその分野で強みを持った企業との連携により双方がメリットを享受する。このような動きが今日常態化している。この背景には、企業が従来 of 既成概念を否定し、生き残るために新しいルールシステム構築が急務であるという危機感に起因している。単に生産機能の移転だけではなく、マネジメントのグローバル化も要請される時代になったという事である。

最後に、事実としてグローバル化が進むのであって、そのための対策が企業にとって必要なものである。この変革を政治・経済・教育の分野でポジティブ（前向き）に受けとめ積極的に対応し素晴らしい展望（ベル・エポックな）時代とするか、それともゼノフォビア（保守的/外国嫌い）的な過去の成功体験・制度のしがらみの中で対応していくか、日本の将来を占う意味で試金石となると思う。